瓔（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 27
紅玉集 …… 30
俳誌交歓 …… 31
1月号月評 …… 32
恵贈句集拝見（82） …… 34
特別作品「北欧の夏」 …… 36
琥珀集作品鑑賞 …… 38
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 39
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 41
別冊100号　会員自選句鑑賞（3） …… 44
他誌転載 …… 48
琵琶湖俳句サロン …… 49
イザナミの言語学（13） …… 50
長岳寺・石上神宮吟行 …… 52
エッセイ「弁えごと」 …… 54

2015/1　第106号

今月の一句

藻林に初夢顔の虎魚寝て

桂樟蹊子

（平成二年作）

宇奈月温泉の最寄駅魚津の近くに魚津水族館がある。正月四日、温泉に持ち込まれた仕事も終わり水族館を訪れた師は、虎魚の水槽を覗かれた。青い藻の生えている中に、顔を突っ込んで眠っている虎魚を見ての作。夢を見ているのか胸鰭をわずかに動かしているのを見て作られた一句である。「藻林」は樟蹊子の造語であるのにご注目いただきたい。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

越前窯

塩路隆子

猪避けの石垣高し陶師の居

窯元の薪割る音や小六月

冬うらら窯入れを待つ楽茶碗

窯出しの壺に小春の日のぬくみ

棲みつきて人馴れ狸窯跡に

窯囲む雑木林に冬芽の香

土捏ねし指ほぐしけり夜の出湯

PDF= 俳誌の salon

一月号光耀抄

塩路　隆子選

軒吊りの枯れたる黍や神楽宿　坂上　香菜
プラタナス銀河の夜を立ち尽くす　常田　創
茅葺の中門妖しさねかづら　山口キミコ
麹屋の破風より湯気冬に入る　落合　晃
早ばやと初冠雪の穂高槍ヶ岳　増田　一代
瞋目の不動一躯に寒さ増す　竹内　悦子
探幽の龍生き返る古都の秋　飯田美千子
草原と空はわがもの日向ぼこ　松田　和子
貌朽ちし木仏に腕や冷まじき　宮田　香
奈良に来て杉の割箸菊膾　宮崎左智子
母の忌の明くるや秋思募るまま　山崎　里美
大極殿の鴟尾耀けり天高く　井口　淳子
夕暮の古墳に集く小鳥かな　石川かおり
スカラベの眼に赤き石冬うらら　橋本　靖子
黒塀の残る赤坂秋の暮　伊東　和子
野菊咲くアメリカ村を残す町　伊藤　和子
秋しぐれ黒々として溶岩台地　伊藤　純子
草叢は風のふところ秋深し　大島みよし
環濠に白壁の蔵小六月　笠井　清佑

PDF= 俳誌の salon

待望の鳥毛立女や古都の秋　桂　敦子
矍鑠たる友と崇めて松手入　北尾　章郎
境界は形だけなり柿落葉　国包　澄子
初紅葉丹色鮮やか木棺墓　小西　和子
愚痴こぼしつつ参道の落葉掃　坂根　宏子
栗ひとつに及ぶ噺の猿と蟹　笹井　康夫
終章に意表突かるる秋灯下　阪本　哲弘
沢庵の歯切れ良き音今朝の冬　塩路　五郎
雁が音の空へ四神の竹オブジェ　鈴木　照子
冬めける苔の蹲踞まろやかに　鷲見たえ子
庄川の籠の渡しや鵙の声　田中　淺子
山霧や天地を睨む青不動　辻　知代子
一掬が国宝の技紙を漉く　中村ふく子
鉄橋を渡れば天守霧の中　西田　史郎
藍咲かせ藍商人の屋敷跡　能勢　栄子
落葉焚く昭和の匂ひ奥嵯峨野　藤見佳楠子
漱石忌壱円也の句集読む　小林　久子
秋入日五尺のわれに丈の影　佐用　圭子
粟羊羹合と匁の料理本　西郷　慶子
椅子に座し法話拝聴薄もみぢ　秦　和子

PDF= 俳誌の salon

近隣が仮装で集ふ秋の夜　土井久美子
日の当たるここが正面藁こづみ　常田　希望
産みたての卵啜るや鵙高音　杉本　綾
秋寒や一等工女の赤たすき　藤本　秀機
下戸なれど一献美し菊膾　粟倉　昌子
公家落とす時代祭の暴れ馬　高谷　栄一
竹林の褥となれる今年藁　福本すみ子
むべの実や不老長寿は埒もなき　松岡　和子
嵯峨菊や検診を待つ人の黙　川崎　利子
露天湯は紅葉の河畔昼の贅　中井登喜子
貴船菊の白さ残れる暮色かな　松田　洋子
時雨来て知らぬふたりが傘の内　三川美代子
大根干す妣の百影追ひながら　宮越　久子
献立の予定にもなき大根買ふ　宮濱　安子
俥夫憩ふ河畔の窪地冬はじめ　森田　利和
京寒き如水と名乗る町静か　山田　愛子
木棺の丹の鮮やかや冬はじめ　山本　孝夫
大根煮が大好きといふ留学生　山本　丈夫
揚琴と二胡響き合ふ秋日和　横田　矩子
寂れゆく剣豪の里木守柿　吉田　宏之

PDF= 俳誌の salon

獣らの囲む明恵の軸や冬　渡部　法子
杖をつく菊人形の芭蕉曾良　伊藤　憲子
浪音の宿のくえ鍋秋の旅　稲田　和子
すらり立つ若鹿の瞳に青い空　伊庭　玲子
鵙日和存在感を誉められて　大谷　信子
合掌建窓に初冬の灯が点る　大越　義雄
蒼天に銀杏黄葉の眩しかり　大松　一枝
秋寒の波涛のしぶき竜飛崎　片岡久美子
黄不動へ特異日といふ文化の日　木戸　宏子
落書の相合傘へ初しぐれ　黒住　康晴
有明の月明らけしけふも晴　谷口　俊郎
流鏑馬や五色飛び散る秋の宮　十時　和子
野仏の幾百年や秋の暮　中井　弘一
木の橋を十歩で渡る里の秋　中川すみ子
金声に唄ふ追分文化の日　中本　吉信
逆光の西山黒し秋夕焼　難波　篤直
久方に秀麗の富士秋の旅　西垣　順子
庫裡の朝大すり鉢にとろろ汁　西村　敏子
栗の里産屋につるす鋳びし鎌　人見　洋子
風の中子らを迎へる冬紅葉　平井　紀夫

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

常田　創

湯冷めしてしまう読書をやめられず
柚子ひとつ捥いできたりしお食い初め
なにもかも小さき冬着抱っこの子
クリスマスを大切にする家族かな
プラタナス銀河の夜を立ち尽くす
木枯らしやジョンは尺八奏者なり
正月や勉強のこと励まされ

高千穂　坂上　香菜

高千穂の神々のこと冬紅葉
黄落や天の岩戸の杜深き
蝶鮫を飼うたる峡や紅葉降る
紅葉濃し峡は天然記念物　（高千穂峡）
軒吊りの枯れたる黍や神楽宿
歓迎のまづは熱燗神楽宿
初雪の襞を顕はに阿蘇五岳

藤原京　山口キミコ

茅葺の中門妖しさねかづら
野菊咲く藪の羅漢の戯け顔
池の端を照らす一群石蕗の花
三山の囲む宮跡秋桜
妻争ひ伝へ三山うすもみぢ
見はるかす藤原京や冬雲雀
古の大極殿に木の実音

PDF= 俳誌の salon

冬めく　落合　晃

冬めくや工都の空の吹き晴れて
尾を引かぬ出船の汽笛初時雨
地下鉄の出口に迷ふ酉の市
麹屋の破風より湯気冬に入る
里山の日暮れを惜しむ残り柿
年上の干支など問ふも小春縁
並む銀杏黄葉を急ぐ一樹かな

十三夜　増田　一代

安曇野の尾根うっすらと十三夜
日差受けおしくらごっこ信濃柿
紅葉の明神岳は日本晴
朝霧の高台の街チロルめく
どんぐりを拾ひ集めて弥次郎兵衛
熟年の野外スケッチ秋うらら
早ばやと初冠雪の穂高槍ヶ岳

からたちの実　竹内　悦子

鎌倉期の仏にまみえ冬初
三井寺の仁王恐し初時雨
雪蛍長等の山を浮遊して
瞑目の不動一躯に寒さ増す
からたちに残る実一つ枳殻邸
大胆に志功の描く襖かな
石垣に嵌る石臼紅葉邸

鮭遡上　飯田美千子

フラメンコをどる奇想や秋歌舞伎
火祭や怒声と火の粉飛び散りぬ（鞍馬の火祭）
朗読の宇治十帖や古典の日（十一月一日）
時代ごとの髪型披露文化の日
ふる里の川を忘れず鮭遡上
探幽の龍生き返る古都の秋（泉涌寺）
まねき書く若き世代や足揃

PDF= 俳誌の salon

草　原

松田　和子

草原に寝転ぶ贅や秋惜む
草原と空はわがもの日向ぼこ（ソラノネ）
秋麗や琵琶湖眼下にティータイム
異国かと思ふテラスや蔦館
もてなしの庭と御膳や秋深み
久に会ふ笑顔あたたか紅葉晴
東山大の字誇る秋ひと日

神の留守

宮田　香

勾玉に集まる光神の留守
貌朽ちし木仏に腕や冷まじき
巫女の鈴紅葉且つ散る宮居かな
立冬や伊太利亜フェアのワイン買ふ
妖怪のペンキ塗りたて小鳥来る
ハロウィンの仮面賑やかカフェの窓
金色に靡く鬣菊花賞

隼人瓜

宮崎左智子

寂しさの秋を彩る一樹かな
水嵩の滔々として秋の川
奈良に来て杉の割箸菊膾
飛行機雲無音の宙を裂く秋気
木枯に押されて入る牛丼屋
隼人瓜呉るる人あり思案の日
小春空ぽっくり寺の賑はへる

秋　思

山崎　里美

落葉散る虎優勝の碑のほとり
東山よりの秋風受くるタワーかな
母の忌の明くるや秋思募るまま
妣代はりの姉より届く富有柿
児ら抱きて上る愛宕や薄紅葉
赤帽の児ら見失ふ紅葉山
落葉踏みマラソンの子ら黙々と

PDF= 俳誌の salon

平城京阯　井口　淳子

大極殿の鴟尾輝けり天高く
見渡せる限り宮阯の芒原
闊歩する天平の衣や菊人形
秋風になびく舞衣刻忘れ
秋天に轟く演舞太鼓音
再現の遣唐使船秋思いま
都びとになりたるひと日冬近き

冬はじめ　石川かおり

撫で牛の背にぬくみや照紅葉
夕暮の古墳に集く小鳥かな
てのひらで包む湯呑みや暮の秋
四代目の餅屋の主茶の木咲く
琺瑯鍋にジャムふつふつと冬はじめ
あの山は母の産土冬紅葉
夕映えや水面にゆらぐ冬紅葉

スカラベ　橋本　靖子

小春日の凪をミシガン音も無く
スカラベの眼に紅き石冬うらら
終生の友の一語や蔦紅葉
冬茜遠路の客を送る道
今朝の風冬の到来想はする
喪の便り早ばや届き神無月
壁掛のマリオネットにマフラーを

あづま旅　伊東　和子

行く秋の富士を雲間にあづま旅
お台場の街はパレット秋灯
黒塀の残る赤坂秋の暮
秋薔薇のガーデン迷路アリスめく
コスモスを撮りたる余白空の青
女優名の秋の紅薔薇凛と咲く　（イングリッドバーグマン）
秋深し旅の荷を解き崎陽軒

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

嵯峨菊

小林　久子

嵯峨菊の白砂に映ゆる勅使門
大寺や銀杏黄葉の降り止まず
唐門の絢爛仰ぐ秋うらら　（西本願寺）
山茶花のうす紅色や恋淡き
漱石忌壱円也の句集読む　（大正六年初版）

露の窓

佐用　圭子

着ぬままの服積み上ぐる秋日和
放生の虫舞ひ戻るバルコニー
鬼皮は爪の固さや栗を剥く
空覗く広さを拭ひ露の窓
秋入日五尺のわれに丈の影

栗羊羹

西郷　慶子

風のつぶ雨のつぶ打つ新松子
栗羊羹合と匁の料理本
父見舞ふ道の辺桃の帰り花
父の速球受けて笑顔や新松子
五時限目板書びつしり冬ぬくし

初紅葉

秦　和子

境内の斜面彩る初紅葉
椅子に座し法話拝聴薄もみぢ
紅葉のまさにパノラマ子らはしゃぐ
運動会イケメンのパパ駆り出され
とび抜くるランナーの背の秋陽かな

秋の集ひ

土井久美子

文化祭セリフも振りもいとほしく
舞台上照れる児の頬紅葉照
ハロウィンや魔女の鞄は飴だらけ
近隣が仮装で集ふ秋の夜
紅葉狩少し早くてグラデーション

PDF= 俳誌の salon

紅玉集

きむらかなで（二才）

しぼしぼの赤ちゃんがけふうまれたよ
赤ちゃんがかなでおねえちゃんを見ていたよ
もみぢ拾ってママへおみやげできました

土井ここの（小二）

風邪を引き何処にも行けずつまんない
学芸会はくしゅたくさんもらつたよ
さむくてもテニスのたいけつ勝ってやる

松久　奈桜（小三）

三回転スケートせん手になりたいな
スケート場私もくるくる回りたい
スケート場せん手みたいにジャンプしたい
氷の上ペンギン気分ですべったよ
ハロウィンは楽しみだけど少しこわい
ハロウィンの今年の仮装何にしよう

廣瀬　将也（小六）

霜降りて寒さに驚き目が覚めた
干し柿に甘くなれよと声をかけ
陶芸は寒くてうまくできないぞ
人々に感謝表す音楽会
朝霧で朝日はまるで月のよう

土井穂乃佳（小六）

学芸会力あはせて頑張った
裏方も全部みんなで学芸会
父母の笑顔溢れる学芸会

塩路　彩奈（中一）

朝の道皆の口から白い息
綿菓子を作る楽しみ秋フェスタ
砂利道の真赤な紅葉集めよう
冬の汗羽球のラリーくり返す
手袋もマフラーもして塾帰り

塩路　遼（中三）

高校の合格祈る冬日和
冬うらら誕生祝う友の声
厚着して勉強部屋に閉じ籠もる
熱あつのクリームシチュー湯気立てて
誕生日暁空冬の流星群

PDF= 俳誌の salon

一月号月評

塩路　隆子

時々試みることだが一月号の月評は瑠璃集に焦点を当ててみる。

漱石忌壱円也の句集読む　小林　久子

漱石の忌日は十二月九日であろ。その日、読んでいた句集には、定価壱円と書かれているのに気がついた作者。「壱円也」の表現に時代を感じ、句集の重みが伝わる。優れた措辞の選択である。

秋入日五尺のわれに丈の影　佐用　圭子

秋の日は、釣瓶落しと言われろほど暮れてゆくのが早い。その時、自分の丈と同寸の影が生まれる瞬間がある。そのシャッターチャンスを上手く捉えられ、よい作品に仕上がっている。

栗羊羹合と匁の料理本　西郷　慶子

第一句と同じような素材を使った句である。広さを反・坪で、体積を升・合で、長さを尺・寸。重さを貫・匁で表した頃の料理本を使って栗羊羹を作られた。１９５９年には、センチメートルやグラムに改正されたからそれ以前の料理本である。伝来の味を楽しまれたのであろう。懐かしさが滲みでている句。

椅子に座し法話拝聴薄もみぢ　秦　和子

昔と違って、寺のお堂で行う行事にも、椅子が使われるようになり楽になったものである。足が痺れるなど久しく経験したことがなく、それに気を取られないで、ゆっくりと法話も拝聴できるのであろう。上手く表現された。

近隣が仮装で集ふ秋の夜　土井久美子

三女を持たれる若いお母さんである。紅玉集に二人の子供さんの投句をいただいているが、お母さんの努力があってこそ、子供たちも俳句が続いていると感激している。ハロウィンの句。最近は薄れてゆく、家族ぐるみのお付き合いの残る東京杉並区の、酒落た生活の一こまが窺われ、楽しさが伝わる。

日の当たるここが正面藁こづみ　常田　希望

八月に生まれた文ちゃんももう三か月。育児の楽しさが伝わる句にお目に掛かることがある。この時期でないと作れない句を、倦まず弛まず作り続けて欲しい。作者の観点のよさを褒める言葉が外部からも聞こえ嬉しい。藁塚に正面などあるとは思えないが、作者はそれを見詰め正面と断定、その反対が後ろと楽しんでいる。俳諧味のあるよい作品である。〈以下略〉

PDF= 俳誌の salon